CCI サロン この人，紹介

くすりの富山で超分子化学に出会って

大石雄基



富山大学薬学部の記念碑群。富山大学薬学部には 130 年の歴史がある

くすりの富山に導かれて

静岡県で生まれ育った筆者は，大学進学を機に現所属の富山大学へ入学し，気付けば富山で 20 年近い歳月を過ごしている。大学受験までは富山県に足を踏み入れたことすらなかったが，「くすりの富山」という言葉は心に残っており，富山大学薬学部を志望した。富山には 300 年以上続く配置薬業の伝統があり，現在も医薬品メーカーが集積し，全国トップクラスの医薬品生産額を誇る。豊かな自然の下で薬学を学ぶには申し分ない環境であり，何より寿司や日本酒の美味しさも相まって，すっかり富山に根をおろしている。

超分子化学との出会い

筆者は現在，超分子化学を基盤とした研究を推進しているが，これは富山に薬学を学びに来た当初の想定とは大きく異なる展開である。その原点は，薬学部 1 年生で受講した「物理有機化学」の講義にある。初めての専門科目でどんなことを学べるのかを楽しみにしていたところ，担当の井上将彦教授がいきなり相対性理論の話を始め，度肝を抜かれた。威圧感のある風貌も相まって「この人は本当に薬学部の先生なんだろうか」と半ば疑いながら講義を受け始めたが，知的好奇心を強く刺激する講義ですっかり引き込まれた。受験勉強に染まっていた筆者にとって，「教科書を疑いなさい」という言葉は印象的で，今もなお研究者としての大事な心構えとして胸に刻んでいる。

その後の研究室配属では，小学生から続けてきた野球で鍛えられた体育会系気質もあり，厳しい環境で鍛錬したいと考え，井上先生の研究室の門を叩いた。当時の井上研では，勉強よりも肉体労働が得意な学生は阿部肇先生（現・姫路獨協大学）のグループに配属されるのが通例であり，筆者も一片の異論もなく阿部先生のもとへ送られた。井上先生は薬学という枠に固執せず，真に価値ある成果を追求する姿勢を貫いており，その中で阿部先生は超分子化学を基盤にした機能性分子の創製に取り組んでいた。筆者はその研究を通じて，有機合成化学および超分子化学の基礎を徹底的に学ばせていただいた。原子間力顕微鏡での測定など，薬学部の中では異色ともいえる研究も行っていたが，これらの経験は現在の研究に大きく生きている。正解の見えない問いに挑み続ける研究室での日々は刺激に満ちており，気付けば大学教員という進路を選んでいた。

超分子化学の薬学への展開を目指して

大学教員になった現在は，学生時代に培った超分子化学の知見を構造有機化学のみならず，薬学の領域にも展開することを目指して研究を進めている。分野横断的な研究では新しいアイデアが生まれやすく，独自性の高い研究が推進できると感じている。もっとも，手を広げすぎればどの分野からも中途半端と評される危険と常に隣り合わせであり，どの分野に対しても敬意を払って真摯に学ぶように肝に銘じている。

現在の研究が幅広く展開できているのも，多くの共同研究者の支えがあってこそである。筆者の設計した奇天烈な分子の光物性解明には，本学理学部の野崎浩一先生と岩村崇高先生に長年お付き合いいただいている。薬学への本格的な展開にあたっては，本学薬学部横山悟先生，和漢医薬学総合研究所早川芳弘先生に動物実験等でご協力をいただき，頭が上がらない思いである。共同研究をお願いする際には，相手の先生にご負担を掛けてしまわないかと不安になり，いつも気が引ける。それでも，どの先生も快く受け入れて下さり，科学コミュニティの温かさと寛容さを実感している。また，公募班として参画した学術変革領域「メゾヒエラルキーの物質科学」では，地方大学の若輩者である筆者にも分け隔てなく接して下さり，現在も共同研究を続けて下さる先生方に深く感謝している。ご協力いただいている先生方に報いる成果を，必ず形にしていきたい。

今年度から筆者は，学生時代に受けていた「物理有機化学」の講義を担当する立場となった。かつて自分が心躍らせた講義を，今度は自分が届ける番である。相対性理論の話をするかどうかは，まだ思案中である。富山という土地に育ててもらった研究者として，次の世代が化学の面白さに出会うきっかけを少しでも作れるよう，これからも研究と教育に邁進していきたい。



おおいし・ゆうき
富山大学学術研究部薬学・和漢系　講師
〔経歴〕2016 年富山大学医学薬学教育部にて博士（薬科学）の学位を取得。同大学医学薬学研究部助教を経て，2024 年 4 月より現職。〔専門〕超分子化学。
E-mail: ohishi@pha.u-toyama.ac.jp